

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1301

あらあらしく事がらを処理するからとて、公正な人ではない。賢明であつて、義と不義との両者を見きわめる人、粗暴にならず、きまりにしたがつて、公正で他人を導く人が、道を実践する人である。
(釈迦)

△解説▽あらあらしく、横柄な態度によつて、自分の偉大さを示そうとするのは勘違い。徳ある人とは、真実を見極め、冷静で、そのときに応じて正しい方法で相手を導く。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 2 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1300

譬えば倒れた者を起こすように、覆われたものを開くように、方向に迷つたものに道を示すように、…種々のしかたで真理を明らかにされました。
(『原始仏典』)

△解説▽ブツダの教えを受けて、納得し、受け入れたものが、ブツダをたたえることは、原始仏典で頻りに用いられている定型表現である。ここには、相手を救い導きたいという慈しみの気持ちと態度が的確に表れていると言えよう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 1 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1303

世を処するには一步を謙るを高しと為す。歩を退くは即ち歩を進むるの張本なり。
(『菜根譚』)

△解説▽人としてこの世の中において生きるとき、自分から一步ゆずるのが優れている。その一步さがることが、さらなる一步を進むものにもなる。つねに控えめな態度の大切さを説き、人に善きことを施すのが、実は自分のための土台となるという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 4 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1302

常人の情、之を愛すれば則ち其の是なるを見、之を悪めば則ち其の非なるを見る。
(『近思録』)

△解説▽普通の人の情として、気に入っている人については良いところが目につき、憎んでいる人については間違っているところが目につくものである。物事を見るにあたって、好き嫌いが基準になりがちである。しかし、冷静な心をもつて、真実に照らし合わせて判断することが大切である。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 3 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1305

吾我を離るるには、無常を観ずる是れ第一の用心なり。

（『正法眼蔵随聞記』）

△解説▽「吾我」とは自我のこと
で、「私が、私は」という執着心。
自分本位の考え方であり、その心があるために、他をありのままに見ることができていない。それを離れることが重要だといふ。そのためには、ものごとは無常である（この私は無常である）と身をもって知ることが何よりの重要な心得である。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 6 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1304

人は世間愛欲の中に在りて、
独り生じ、独り死し、独り去り、
独り来る。行いを当いて苦楽の
地に至り趣く。身自ら之を當
く。代わる者有ること無し。

（『無量寿経』）

△解説▽人間は愛欲の世間の
中で、独り生まれて独り死んでいく。
それを誰かに代わってもらいたくも
代わってもらえないし、一緒に行
ってほしいといっても無理なこと。
老病死は必ず迫ってきて、自分自身
が受けなくてはならない。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 5 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1307

放下著

（『從容録』）

△解説▽私たちは物質的にも精神
的にも多くのものを背負つてしま
う。そのための苦悩も少なくない。
「放下」とは「手放す、投げ捨てる」、
「著」は助辞で「すべてを投げ捨て
てしまえ」の意味。自分の持ち物を
捨てるのはまだ簡単だ。しかし、自
分への思い（執着）を捨てるのはむ
ずかしい。さらには「すべてを捨て
た」というこだわりさえも捨てよと
いう。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 8 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1306

自分が老いゆくものであつ
て、また老いるのを免れないの
に、他人が老衰したのを見ると、
考え込んで、悩み、恥じ、嫌悪
している。

（釈迦）

△解説▽老い、病気になる、死ん
でいく。これは他人ごとではない。
しかし、他の人がそのような状態に
なったのを見ては、悩み、時には嫌
悪してしまう。おかしなことである。
なぜなら、これは自分の問題でもあ
るからだ。釈迦もこの点に気づいて
実践修行を始めたという。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 7 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1309

心よ、わたしは正しく気をつけることでそなたを縛りつけよう。みずから制して、そなたを訓練しよう。奨励努力という重荷におさえつけられて、ここから遠くへ行くことはないだろう。（『テラガーター』）

△解説▽心は自由に飛び回る。刺激を受けてあちらこちらへと。その心ありのままに観察し、反省し、正しく気をつけること、奨励努力によって、制御したいものだ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 10 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1308

容色を見ては、愛らしいすがたに心を向け、心の落ち着きは失われる。愛染の心をもって感受し、それに執着したままである。迷いの生存の根元にみちびくかれのもろもろの汚れは増大する。（『テラガーター』）

△解説▽迷いの生存、苦しみへと発展してしまう様子を、心のはたらくきに注目して説明する。心は対象に刺激され、求め、執着し、煩惱という苦しみの原因を作り出す。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 9 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1311

心を、あらゆる事柄からはなれるように抑制すべきではない。すでに自制されている心を抑制すべきではない。悪が生じることからは離れるように、それぞれの場合ごとに心を抑制すべきである。（『釈迦』）

△解説▽よいことを目指す心は抑制する必要はない。心の働きすべてを消し去ることが目的ではない。悪が生じるものとなる、さまざまなかの活動を知り、それらを抑制すべきである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 12 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1310

人のいない地域（荒野）に清冷な水があっても、それを飲まなければ、涸れて消え失せるように、愚劣な人が富を得ると、自ら用いることなく、他人にも与えない。（『釈迦』）

△解説▽決して富を得ることが悪いとはみなしていない。ただ、財を得て蓄えること自体が目的となつて、自ら正しく用いることをせず、施しもしないのは、涸れて消えてしまう荒野の清水のようだという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 11 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1313

忘恩の人は、かならずや亀裂をみる。たとえ、かれに領土をすべて与えても、彼を喜ばすことはできない。

（『ジャータカ』）

△解説▽人は基本的に孤独であるが孤立してはいない。ゆえに、かならず人の恩を受けて生きてきたのであるから、それを忘れるべきではない。恩を知り、恩を返す、つまり報恩が大事である。苦しむ人がいたなら、つくす人が立派な人である。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 14 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1312

一言にして真理とは何かといえ、それはつまり、いつ、どこでも、何人も、きつと、そう考えねばならぬもの、それが真理です。

（高神覚昇）

△解説▽宗教や哲学などでよく用いられる「真理」ということは、この説明は「真理」とはなにかについて明確にわかりやすく述べている例だろう。加えて、それは「思惟必然性」「普遍妥当性」ともいえる述べている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 13 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1315

施与（布施）と、親愛なることば（愛語）と、人のためにつくすこと（利行）と、協力すること（同事）と、これらが四つの包容の態度である。

（釈迦）

△解説▽共に生活する場合、人を温かく包容する態度が重要。それぞれのメンバーがこの徳目を実行すれば、互いに引きつけ合う関係ができ、その共同体は必ずよい方向へと進むだろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 17 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1314

憎む人が憎む人にたいし、怨む人が怨む人にたいして、どのようなことをしようとも、邪なことをめざしている心は、それよりもひどいことをする。

（釈迦）

△解説▽心の方向性によって人生は大きく異なる。正しい方向へ心を転換し、歩み続けたいものだ。この文章は続けて「父母や親族がしてくれより優れたことを、正しく向けられた心はしてくれ」と述べている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 7. 15 中村元記念館協力